

木田余台

—茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—



1 9 8 9

土浦市教育委員会

目 次

序	1
はじめに	2
プロローグ	3
発掘調査	4
位置と地形	6
遺跡	8
旧石器時代	10
縄文時代	12
弥生時代	16
古墳時代	18
古墳群	22
歴史時代	28
エピローグ	30

序

土浦市は、水と緑に恵まれ、長い歴史と伝統を受け継いで今日に至っております。

近年では、筑波研究学園都市の発展とあいまって、東京近郊である茨城県県南地域は、各地におきまして開発の気運が高まってきており、当市でもその数は増加する傾向をみせています。

このたび、土浦市大学木田余地内におきまして土地区画整理事業が計画され、その対象地内に存する木田余台遺跡群の処遇につきまして、関係諸機関において協議を重ねてまいりました。その結果、一部の遺跡について記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。

この発掘調査によって、土浦市の古代史を分析解明する一助となれば幸いです。

最後に地元木田余地区の方々や、調査に参加、協力いただいた多くの皆様に心から感謝申し上げござります。

土浦市教育委員会

教育長　日下部

昇

はじめに

木田余地区は霞ヶ浦を望む台地に有り、土地区画整理事業による開発が事業途上にあり、健全で魅力ある住宅市街地の形成が期待されます。

地区内には、周知の埋蔵文化財包蔵地があり土地区画整理事業実施に伴い昨年の2月から12月迄11ヶ月の間、発掘調査をした結果、古代の绳文時代から平安時代までの郷土の歴史を知るに当り、此の上もない貴重な資料となる品々が発掘されました。

其の結果、木田余の台地は大昔の頃より、水と緑、気候、風土には、大いに恵まれた土地であったのです。

先祖の人々は、恐らく平和な日々を営んで居られたのです。此の美しい郷土の山河をこれから後も大切に保護し、子孫に誤りなく伝えていくことが私達木田余に住む者に課せられた責務であろうかと思います。

此の報告書が活用されて埋蔵文化財の保護に参考になることを期待いたします。

木田余土地区画整理事業組合

理事長 小野 明

プロローグ

今、土浦の歴史の一端が解明されようとしている。筑波山の麓にあって、霞ヶ浦を遠望することができるこの木田余台地で旧石器時代から歴史時代へと続く人々の営みは遺跡という形で現代に生きる我々の前に現われた。その考古学的資料は、茨城県でも類い稀なるものであり、その豊富な遺物は、土浦市では他に例をみない量であつた。

今回の報告書は、昭和63年2月から12月までに行なわれた木田余台地の5つの遺跡（稲賀場遺跡、御殿遺跡、宝積遺跡、東台遺跡、東台古墳群）の発掘調査の概要報告書として、その成果の一部を示したものである。発掘調査の成果を公表するのは、調査担当者に課せられた責務と心し、本報告書は平成2年の春には、刊行する予定である。この霞ヶ浦湖岸の木田余の地に生きて、そして名もなく消えていった人々の生活の一端がこの考古学的資料によって解き明かされれば幸いである。

▼遺跡遠景



発掘調査

今回の木田余台地の遺跡群の発掘調査は、木田余土地区画整理事業の昭和62年度と昭和63年度の道路工事及び同事業の切り土部分にかかる遺跡の調査であった。

昭和63年1月28日に同台地の粉賣場・御糞遺跡の道路予定地の試掘調査が行われ、住居址などの多数の遺構が確認された。それをうけて、同年2月6日、木田余土地区画整理組合、土浦市土地区画整理課、土浦市教育委員会社会教育課と日本考古学研究所の4者によって調査の実施に関する協議を行った。その結果、63年2月12日に粉賣場・御糞遺跡の発掘調査が開始された。この道路幅の調査は、同年4月23日で終了し引き続き、宝積・東台遺跡、東台古墳群の調査が実施された。この宝積・東台遺跡、東台古墳群は、土地区画整理事業の切り土部分と一部の宅地造成地の工事に伴う発掘調査であったが、同年8月31日に一旦、調査を終了している。だが、同年11月28日に工事中に古墳の石棺が出土し、東台古墳群、東台遺跡の調査を再び開始し、12月17日で現地作業を終了する。昭和63年の木田余台の5つの遺跡の調査では、住居址308軒、土塙429基、ピット122基、溝状遺構11条、竪穴状遺構3基、埋め塙2基、道路状遺構3条、地下式豪1基、円形周溝状遺構1基、古墳18基、蔵骨器が4基確認、調査されている。

▼東台遺跡





発掘風景（御冥遺跡）▶



発掘風景（穀買場遺跡）▶



発掘風景（穀買場遺跡）▶

位置と地形

木田余台遺跡群（粉買場遺跡、御畠遺跡、宝積遺跡、東台遺跡、東台古墳群）は、土浦市の北部にある木田余台地に存在している。標高25～27mの木田余台地からは南に霞ヶ浦を遠望することができる。この平坦な木田余台地の東と西には、霞ヶ浦に流れこむ河川によって、広く深い開折谷が形成されている。

下の図は、土浦市街地を中心にして、木田余台遺跡群の周辺の旧石器時代から歴史時代までの遺跡を示した図である。（図中の●点で遺跡を示した。）下図の●点の1は粉買場遺跡、2は御畠遺跡、3は東台遺跡・東台古墳群、4は宝積遺跡、5は昭和62年2月に一部を調査した木田余遺跡を示したものである。

霞ヶ浦を中心に群在する遺跡の位置をみても、いかに霞ヶ浦がその周辺の遺跡において日々の生活を営んだ人々にとって、どれほど重要な場であったのか容易にうかがい知ることができる。



(国土地理院発行 1/25,000 に加筆)



▲遺跡の周辺の地形

遺跡



▲ 秩賀場・御美遺跡遺構分布図

秩賀場・御美遺跡は共に、縄文時代中期から歴史時代の遺構が多数検出されている。秩賀場遺跡の遺構は、住居址125軒、土塙75基、ピット16基、溝状遺構4条、道路状遺構1条、藏骨器1基が検出されている。また、御美遺跡は、住居址33軒、土塙175基、ピット39基、竪穴状遺構1基、溝状遺構3条、地下式墓1基が発掘された。

秩賀場・御美遺跡の東側に位置する宝積・東台遺跡、東台古墳群は、旧石器時代から歴史時代の遺物、遺構が検出された。宝積遺跡は、住居址111軒、土塙69基、ピット9基、竪穴状遺構1基、溝状遺構1条、道路状遺構1条、藏骨器3基が検出されている。東台遺跡は、住居址39軒、土塙110基、ピット58基、竪穴状遺構1基、溝状遺構3基、円形周溝状遺構1基、埋め甕2基、そして東台古墳群では18基の古墳が確認・発掘されている。



▲宝積・東台遺跡・東台古墳群遺構分布図

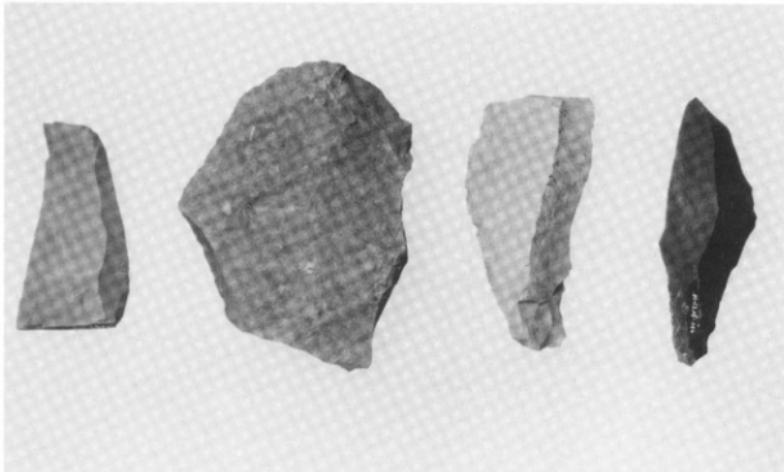
旧石器時代

旧石器時代（もしくは先土器時代）とは、土器の出現する以前の1～3万年前の更新世末葉に近い、第四氷期の寒冷期にあたり、東日本では亜寒帯針葉樹林が広く覆っていた時代という。

当時の生活活動の中心となっていたものは、狩猟活動であるが、住居・炉・墓などといったしっかりした生活の場や施設はほとんどみることができない。これは旧石器時代の人々が一ヵ所に永く留まっていたのではなく、たびたび場所を変えながら狩りをしたり、木の実や草の芽を摘む生活を続けていたからである。

この木田余台では、資料的にきわめて乏しいとはいえる、宝積遺跡と東台遺跡において貝岩と安山岩の石器が発見されている。とくに宝積遺跡ではいわゆるソフトローム層と呼ばれている立川ローム層上位で、貝岩製の石片がまとまった状態でみつかっている。明確な石器はないものの、一定範囲で集中して出土していることから、石器の製作・加工の場があったと考えられている。

▼旧石器時代の石器

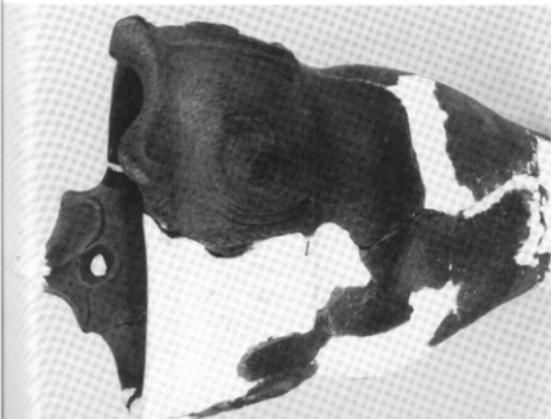




▲縄文中期の土器（御賀SK6）



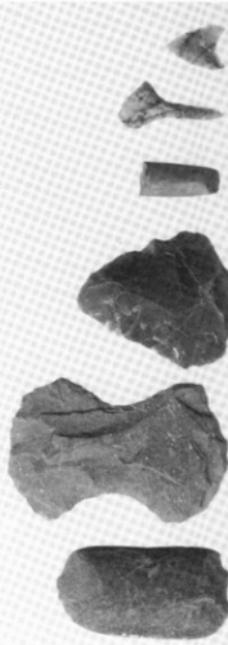
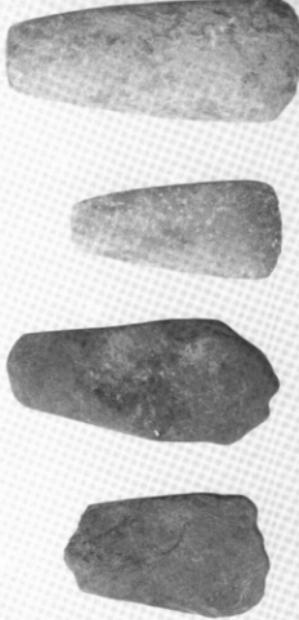
▲縄文中期の土器（御賀SK65）



▲縄文中期の土器（御賀SK22）

▼縄文中期の磨製石器（東台・御賀）

磨器・打製石片・スクレバー・小型磨製石斧・石鏃・石錐（左より）



縄文時代

縄文時代は、今から1万年ほど前から旧石器文化のあとをうけて日本列島に展開し、稻作を中心とする弥生時代が全国的に席捲する紀元前後のころにいたる約80,000年間存続する。この間の気候は、最終氷期も終り、徐々に温暖化となり、今から約6,000～7,000年頃ピークを迎える、やがて現在に近い状況となるといわれている。

こうした自然環境の変化は、常緑広葉樹林を特徴とする豊かな植物相を構成し、瀬戸内海沿岸では、魚介類など豊富な水産資源に恵まれ、さらに重要な食料資源であるシカやイノシシなどの動物が数多く棲息するようになる。この豊かな環境の中で、縄文の人々は狩猟・漁撈・採集といった多彩な食料獲得活動を行い、加えて住居・貯蔵庫を含めたムラの設営・活発な宗教・儀礼的活動の遂行、交易や技術の交流など安定した社会を基づいていく。

いま縄文時代は、この時代を最もよく表象している縄文土器の型式にもとづき、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期に編年区分されている。この木田余台では、縄文早期から生活の跡を確認することができる。早期および次の前期では、あいにく活発な活動の跡をみることができないが、今から5,000年ほど前の中期中葉頃から定着的な生活拠点としての集落が形成されるようになる。

最もまとまった遺跡として御冕遺跡と東台遺跡がある。両遺跡とも竪穴住居とともに多くの貯蔵施設である土坑（どこう）がみつかっている。この住居と土坑は、中期集落では普遍的にみられる構成で、集落の中央部に土坑が集中し、その周縁に住居が構築される。二遺跡とも住居跡はわずかであるが、土坑の数は実に320基を起えている。

この土坑は、縄文時代全般に亘って検出されているものの、とくに中期になって多くの実を冬季に備えるための貯蔵施設である。土坑の大きさは直径1.5m前後、深さ1m前後の円形のものが主流を占め、その断面形は円筒状、袋状・フラスコ状のものが混在している。なお御冕遺跡ではフラスコ状のものが、東台遺跡は円筒状を呈するものが多い。

▼縄文時代の土坑群（御冕遺跡）



土坑内から多量の土器が出土する。破片が多いのは、土坑廃絶後、ゴミ穴として利用したもので、木田余台では確認できなかったが、人骨が出土地として転用することもある。

また土器以外にも石器類や魚介類・灰・焼土なども堆積していることもあり、人為的に埋め戻されていることがわかる。

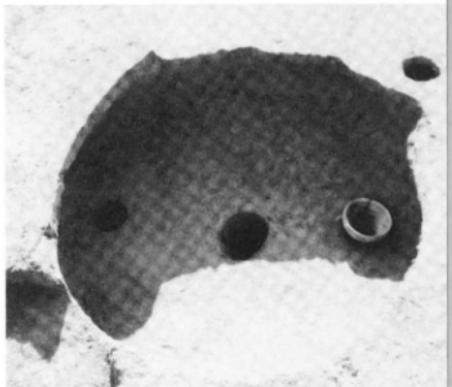
なお中には、完存品が出土する場合がある。とくにフラスコ状の坑隙部奥に埋藏されたまま残されているもの（写真・中）、壁側に柱穴状の穴を穿ち、ソケット状に土器をさし込む場合もある（写真・下）。これらはいずれも深鉢で、ドングリやクルミなどの収穫物を保存・貯蔵の為の土器で、前者が土器そのものを移動させたのに対し、後者は土器の中身だけを取り出すようにしたものであろう。



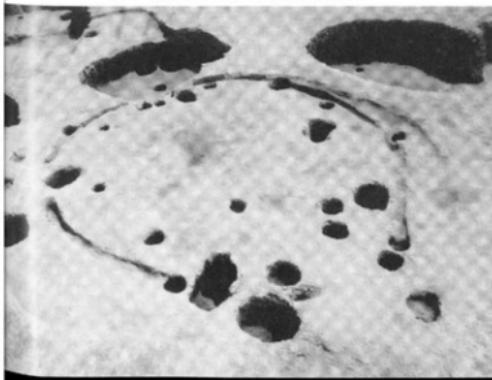
土坑内埋藏土器（東台）上▲

土坑内埋置土器（東台）中▲

土坑内埋設土器（東台）下▶

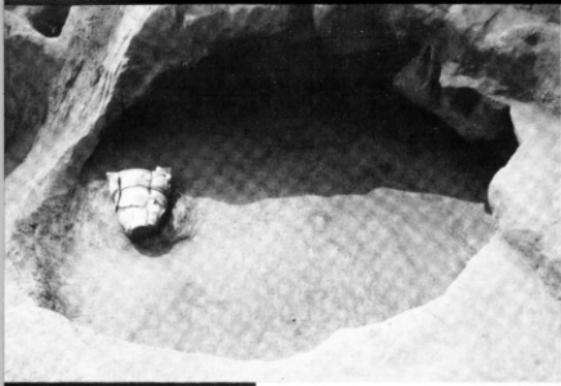


▼中期・加曾利E期の竪穴住居（東台）



地床炉を中心大きく深い主柱穴と小さい支柱穴をもつ住居跡。

円形の周溝が2重にめぐり、柱穴が大小不規則に配されているのは、2回以上にわたって埋築・建替えが行われたからである。



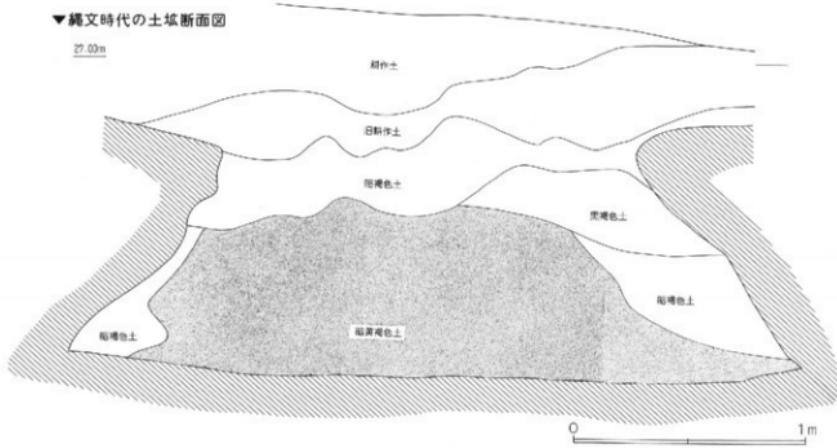
▲土坑内埋置土器（御灵）

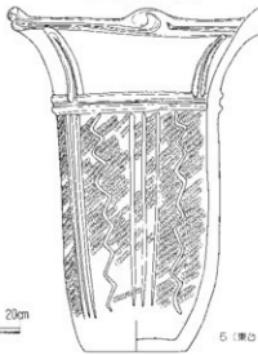
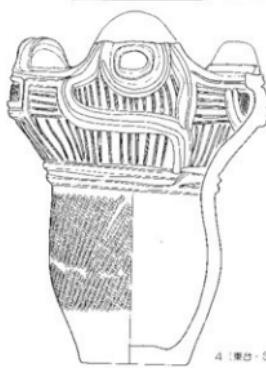
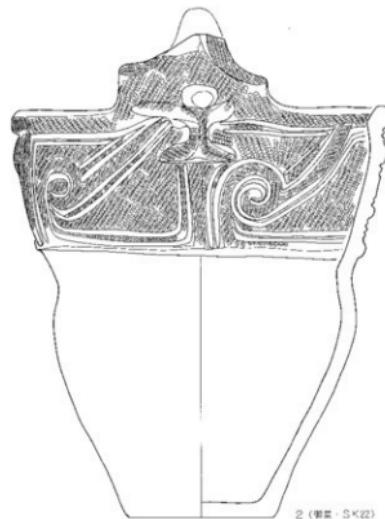
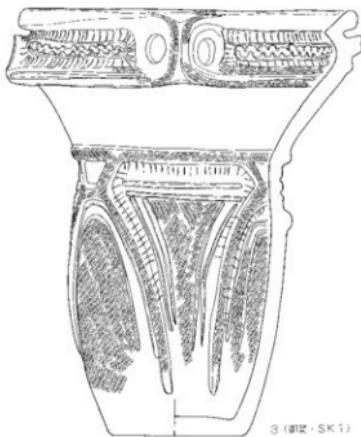


▼土坑内埋棄土器（束台）



▼縄文時代の土塙断面図





0 20cm

▲縄文時代中期の土器

弥生時代

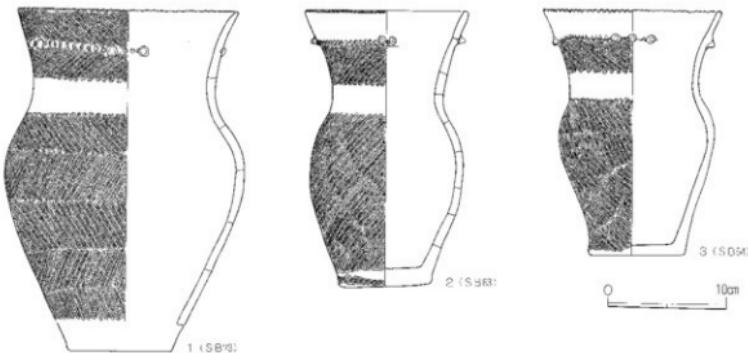
弥生時代は、長い旧石器時代・縄文時代の歴史に比べて関東地方では僅か400年程度の短い時代であるが、その社会上・政治上の変化は激しく、これは結果として前方後円墳という巨大な首長の墓を生むなど階級社会の萌芽期を示唆している。

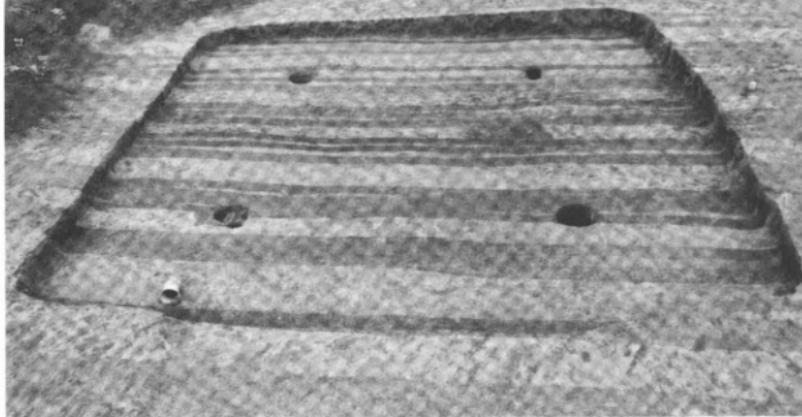
弥生時代は、本格的な農耕社会の開幕であり、この稻作を基盤として発達した。この稻作農耕は、霞ヶ浦周辺で既に当初からある程度完成された技術をもっていたといわれている。水利の確保・灌漑技術の習得といった水田開拓から収穫稻の管理にいたる一連の農耕技術や農具の発展は、日本の歴史上一大画期をなすものである。

この木田余台では、2～3世紀頃（弥生時代・後期）のムラが確認されている。とくに宝積遺跡ではほぼ同時期の十軒程度の竪穴住居群が検出され小集落を構成している。中には一辻8mを越える大形住居もあり、この一棟の住居を中心とする単位集団の存在が考えられる。

住居は、一般的に楕円形を呈しており、やや北寄りに炊事場施設である床面を埋めた地床炉を備え、柱は4～6本、出入口部に梯子の掛けた跡がみられる。全体に土器などの遺物が極端に少ない。

▼宝積遺跡出土の弥生土器（上稲吉式）



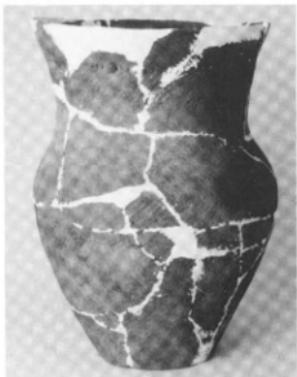


▲弥生後期の竪穴住居（宝積）



▲弥生土器出土状況

弥生時代の竪穴住居の形は、バラエティーに富んでおり、地域や時代によってもかなり変化することは早くから知られている。大きく分けて円形系統と方形系統、その中間に小判形がある。木田余台では小判形から方形（長方形）への変化がみえる。基本的には炉が北寄りにあり、柱が4本記され、炉の反対側に梯子穴がみられるものが多い。



▲弥生土器

▼弥生土器



▼弥生土器



木田余台で出土する弥生土器は北関東系土器と呼ばれ、縄文を多用することに特徴がある。本来の優美な弥生土器のイメージとは掛け離れているものの、縄文土器とは違ってスマートである。またこの時期は「多条柄繩文」が主流を占めるものの、ここでは櫛指文は少なく、複合口縁に小さな粘土粒が貼付けられている。川崎純儀氏はこれを「上総古式土器」として霞ヶ浦沿岸を中心に分布し、弥生時代終末に位置付けられている。

古墳時代

弥生時代に形成された農耕社会は、4世紀ごろからの古墳時代に入ると、古代中央集権国家が成立する。この古墳時代の最大の特徴は古墳の築造にある。古墳とは農耕社会を基盤にして形成された階級社会の産物であり、墳墓としてばかりではなく多分に政治的象徴として機能していたようである。また、弥生時代になると国家的規模で変遷し始める。

木田余台遺跡群では、4世紀から5世紀の古墳時代の集落が、4つの遺跡（稻賀場・御戸・東台・宝積遺跡）において検出されている。この時期の中心となるのは、宝積遺跡で、90軒以上の住居址が確認されている。

次に6世紀から7世紀の古墳時代の集落は、宝積遺跡・御戸・稻賀場遺跡の3遺跡で確認されている。その中心は稻賀場遺跡で約70軒以上の住居址が発掘されている。

4～5世紀の一般的な住居は、規模の大小には関係なく、4本の主柱穴、地床炉、貯藏穴を有している。6～7世紀の住居址は、地床炉に変ってカマドが使われるが、未だカマドを使わず、地床炉の住居址も存在していた。

▼古墳時代の集落（宝積遺跡）





▲前期の住居址（宝積遺跡）

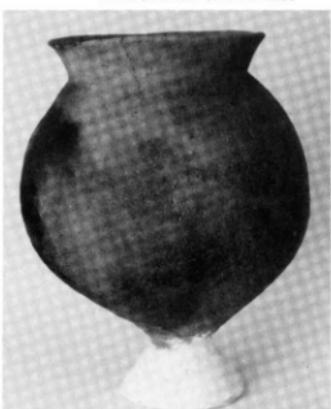
古墳時代前期（4世紀）の住居址からは、土師器という茶褐色の素焼きの土器が出土する。壺・壺・台付壺・鉢・环・壺・臼などがある。



▲前期の土器（粗賀場遺跡・弓）



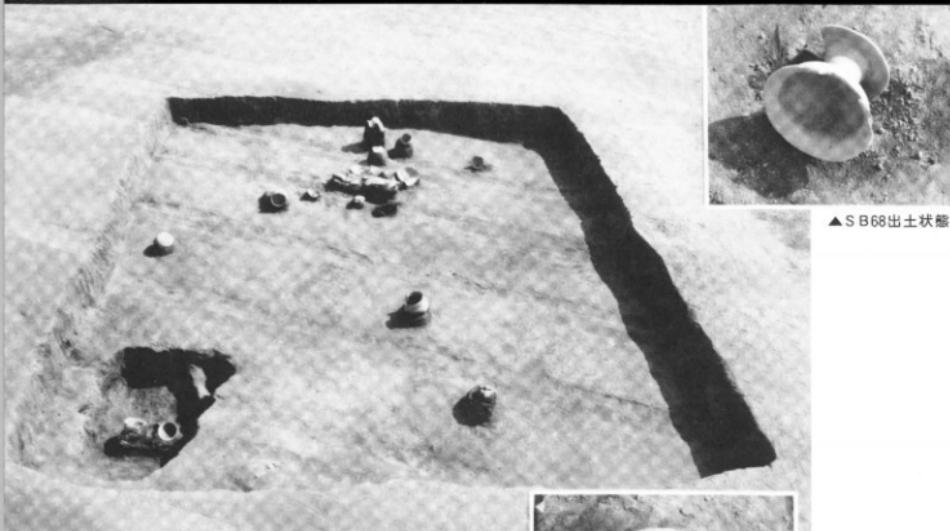
▲前期の土器（粗賀場遺跡）



前期の土器（東台遺跡）▶



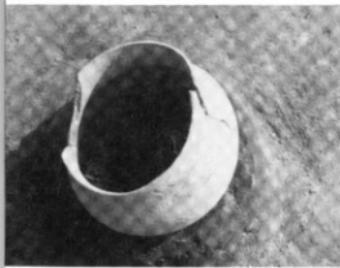
前期の土器（宝積遺跡）▶



▲後期の住居址（宝積遺跡 S B68）



◀ S B68出土状態

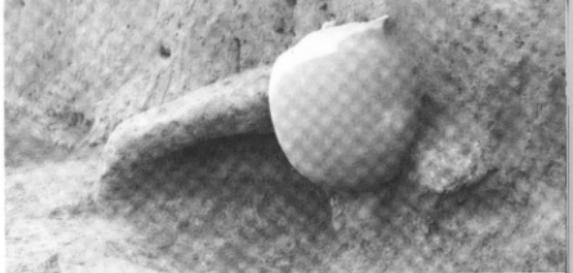


◀ S B68出土状態

宝積遺跡のSB（SBとは住居址に用いられる記号）68は、古墳時代後期（6世紀）の住居址で、12点の土器がほぼ完全な形で出土していた。

この時代になると、一般的にカマドが広く使われるようになるのだが、この住居址では未だカマドは使用されず、地床炉が前時代のまま残っている。

後期の住居址のカマド（穀賣場遺跡）▶



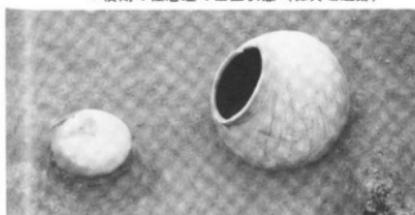
◀後期の住居址の出土状態
(宝積遺跡)



▼後期の住居址群（穀賣場遺跡）

古墳時代の後期（7世紀代）になると穀賣場遺跡などでは、住居址の重複関係が多くなっていく。7世紀代に入ると、どの住居址でもカマドが使用されるようになる。住居址内にカマドが造り付けられることによって、甌による蒸す調理法が一般化していく。

▼後期の住居址の出土状態（穀賣場遺跡）



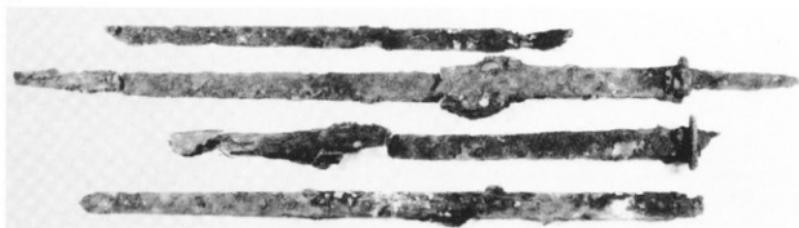
古墳群

弥生時代末葉から築造され始めた古墳は、古代中央集権国家の成立により形成された階級社会の産物であり、墳墓としての機能だけではなく、政治的象徴としても存在していたようである。

古墳時代も後期になると古墳の造営数が爆発的に増大し、限定された墓域内に集中する小型古墳の造営が行なわれるようになる。木田余台地の東台古墳群は、7世紀代の終末期の古墳と推定される。

東台古墳群では、18基の古墳が確認・調査されている。そのうち、前方後円墳が11基、円墳が1基、方墳が2基、完掘されていないため形状の不明な古墳が4基検出されている。これらの古墳の埋葬施設は、全て箱式石棺であったが、大半が破壊されていたため、石棺の残っていた古墳は5基のみであった。

東台古墳群は、ほとんど主体部が盗掘を受けていたため、古墳の副葬品はあまり検出されなかったが、13号墳だけは盗掘されずに直刀・鉄鏃・小玉が複数の人骨と共に発掘されている。



▲古墳出土の直刀（東台古墳群）

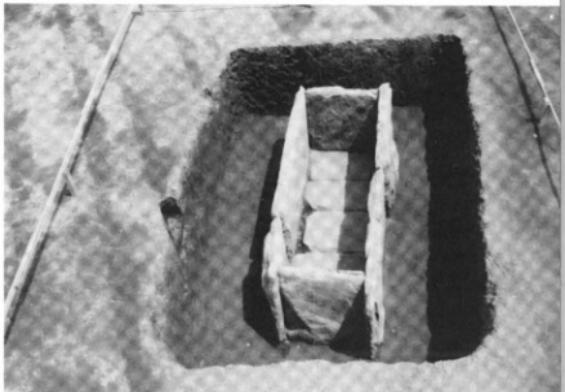
古墳の出土遺物（東台古墳群）▶





▲東台4号墳全景

東台古墳群では、箱式石棺が現存していたのは4・5・6・10・13号墳のみであった。石棺材には練泥片岩がどの石棺にも使用され、切り出してきたものを一つの石棺で十数枚使用している。石棺の大きさは長さが約2m、幅が約70cmを計測した。箱式石棺の位置は、前方後円墳の場合、前方部と後内部の括れ部に配している。



◀東台4号墳主体部





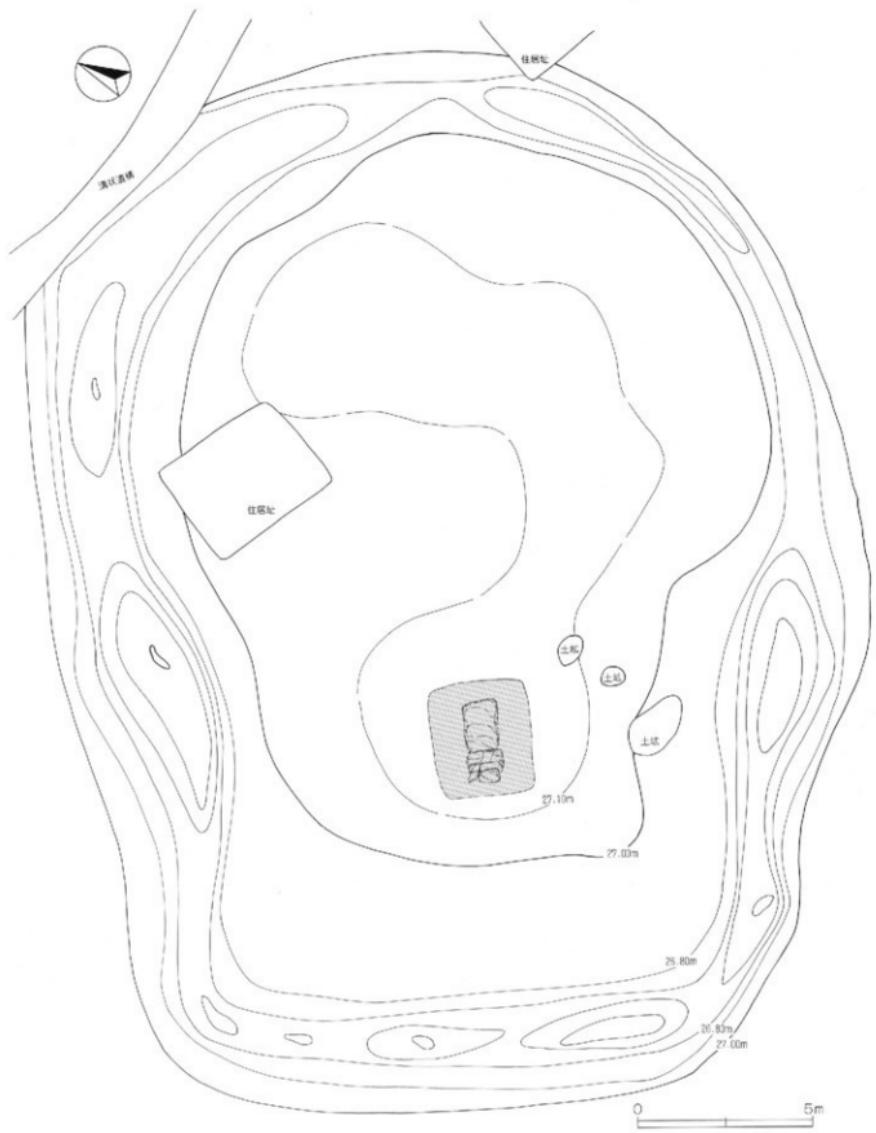
◀ 東台 5 号墳全景



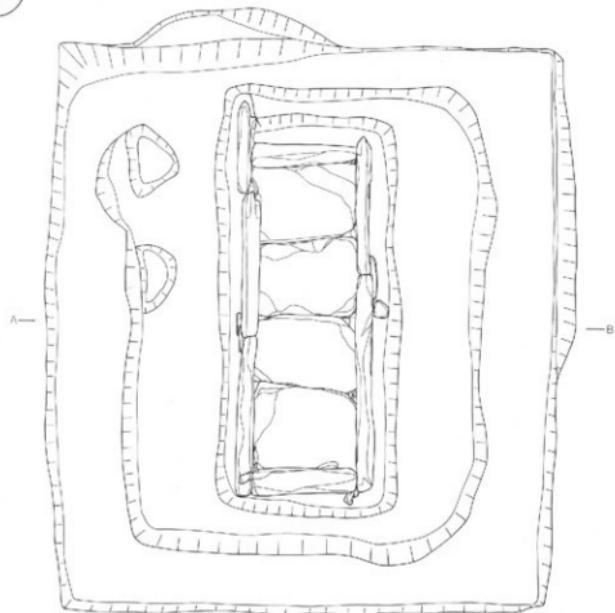
▲ 東台 6 号墳全景



◀ 東台 6 号墳主体部

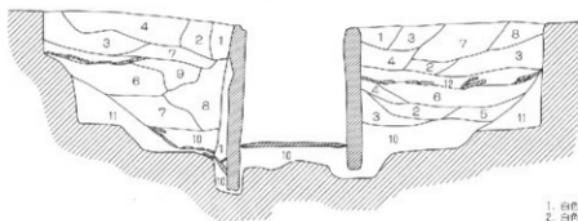


▲東台5号墳丘実測図



A 27.16m

—B

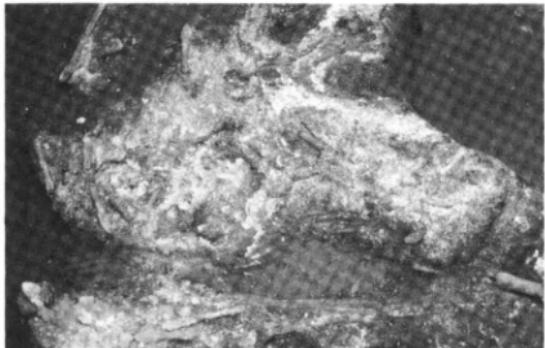


▲東台13号墳主体部実測図

- 1. 白色粘土
- 2. 白色砂土
- 3. 黄褐色土
- 4. 灰白色土
- 5. 黑色土
- 6. 暗灰色土
- 7. 灰黑色土
- 8. 黄褐色土
- 9. 灰白色土
- 10. 黑色土
- 11. 暗灰色土
- 12. 黄褐色土

0 1m

東台13号墳主体部▶

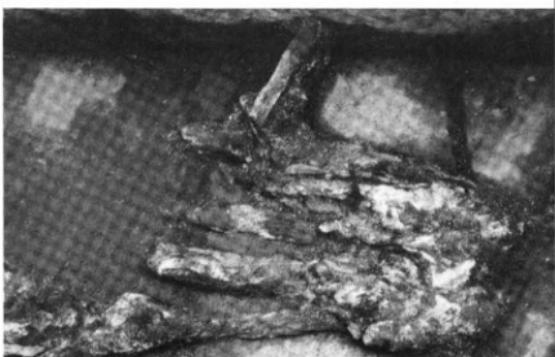


▲東台13号墳主体部人骨出土状態▼



▲東台13号墳主体部鉄鎌出土状態

東台古墳群の13号墳からは、3体以上の人骨が、直刀・鉄鎌・小玉などの副葬品と共に主体部から検出されている。この東台13号墳は、この古墳群の中で唯一のまったく盗掘されていない古墳（前方後円墳）であった。



◀古墳主体部発掘作業

歴史時代

奈良・平安時代

この時代になると、律令制という新たな支配体制による律令国家が成立していく。律令国家は天皇を頂点とした中央集権国家で、都では平城京・平安京などの都城が形成され、一方、地方でも国衛や群衛という行政機關がおかれれるようになる。

木田余台地では、この時代の住居址は粉貢場・宝積遺跡で検出し、その多くは粉貢場遺跡で発掘された。この時代の住居址は一辺4m前後の方形のものが多く、柱穴の数も4本以下の不規則なものが多くなっていく。カマドの構築は前時代から引き続き行なわれている。

▼粉貢場遺跡



粉貢場遺跡と宝積遺跡には、平安時代の蔵骨器が発掘されている。この蔵骨器は、火葬した骨を埋納した際の収納容器であった。粉貢場遺跡で1基、宝積遺跡で3基検出されている。

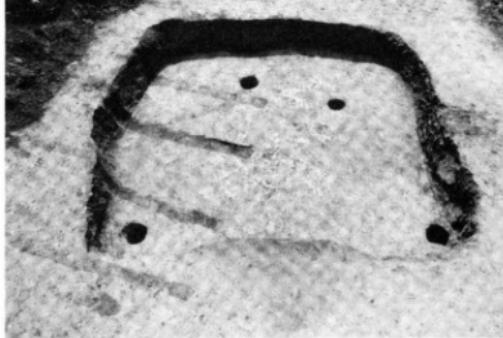
中世以降

中世以降には木田余台では集落は形成されていなかったようである。木田余台遺跡群の中世の遺構は、御灵遺跡の地下式墓などしか検出されていない。

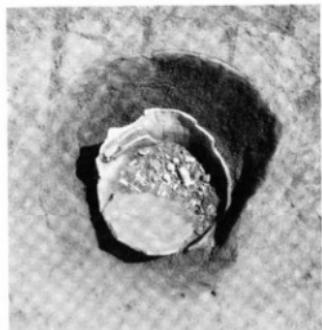
近世の遺構では、東台遺跡で江戸時代の墓塚が1基検出されている。これは、円形の土塚を掘って遺体を直葬したものであった。

平安時代になると住居址の大きさも4m前後的小ぶりなものになり、柱穴の本数も配列も不規則になる。

平安時代では、貴族・僧侶・学者などの文化人が火葬され、蔵骨器に入れて埋納されている。



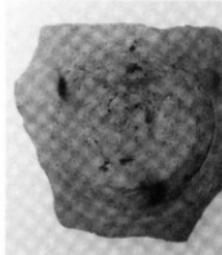
▲平安時代の住居址（宝積遺跡）



▲平安時代の蔵骨器（宝積遺跡）

底面や側面に墨書きで文字の書かれた土器を墨書き土器と呼んでいる。墨書きの目的は、官庁・寺院などの所属の表示や、所有者・使用目的を表したもの、あるいは落書き的なもの、梵字などさまざまである。

▼墨書き土器「亦」（宝積遺跡）



▼墨書き土器「上下」（宝積遺跡）



▲墨書き土器「什」（宝積遺跡）



エピローグ

—木田余台のムラの変遷—

ここ木田余台における原始・古代のムラ跡を遡覗してみると、霞ヶ浦という大きな後背地を控えているためか、旧石器時代から中・近世にいたるまで閑断なく台地一面に遺跡が拡がっている。しかしこれらの遺跡の消長は一樣ではなく、その変遷をみると、前半期は自然発生的なムラが、後半期は政治的な計画的ムラが形成されている。

まず前半期は、旧石器時代から縄文時代に相当しよう。

I、旧石器時代 今から1万5千年前後に位置付けられる遺跡が2ヵ所確認されている。その中の宝積遺跡では頁岩と安山岩を素材とする石器群がみつかっている。ムラの前萌芽期である。

I、縄文時代 縄文時代は、早期末葉から後期中葉までの遺物が確認されている。したがって、草創期から早期後半、および後期後半から晩期全般にわたって遺物・遺構はなく、少なくともこの時期、無住の状態であったと思われる。また早期末葉からも断続的に営まれたわけではなく、発見されたものは少数の土器片だけでおよそ定住の痕跡は認められない。さらに前期後半まで空白が続き、にわかに前期後半（浮島式）になりようやく、木田余台でムラが発生する。調査範囲は限定されるものの土坑の存在、遺物の量などから判断できよう。

さて、木田余台の中でもっとも住居や土坑が頻繁につくられるのは、中期中葉から中期後半にかけてである。第I期ムラの興隆期を迎える。とくに御戸遺跡と東台遺跡は卓越しており、住居の数は少ないものの、土坑は群を抜いている。特徴的な土坑について大まかに述べると、御戸ではフラスコ状で、坑隆部が奥へもぐり、付随施設が少なく、東台では円窓状が主体で、付隨施設を持つものが多い。前者は阿玉台式から中畠式にかけて、後者は加曾利E1式に所属する。これらは後期初頭・称名寺1式期まで続く。やがて後期中葉・加曾利B式期に至って、木田余台の縄文時代は終焉を向かえる。以後、弥生時代末葉まで、木田余台には全く遺跡がなくなる。

後半期は、計画的なムラが形成される段階で、弥生時代から平安時代におよぶ。

Ⅲ、弥生時代　こここの弥生時代の開始は遅く、後期終末・上稻吉式期に限定される。宝積遺跡では市内最大級のムラ跡が検出された。住居は10数軒と少ないものの、拠点的集落を形成している。また東台遺跡では、住居は少ないものの、亞棺墓が2基発見されており、墓域として確認できる。

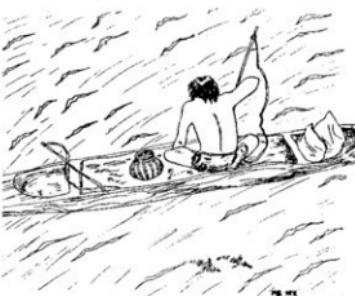
Ⅳ、古墳時代　弥生時代から受け継いで、古墳時代は爆発的膨張といわれるほどムラの増大・拡張がみられる。4世紀代では、松賀場遺跡・御戻遺跡・東台遺跡・宝積遺跡と全域で比較的大きなムラ跡が検出され、まさに台地一面に拡がる住居群がみられる。次の5世紀代では極端に小さくなり、5世紀終末から7世紀までの古墳時代後期では、松賀場遺跡・御戻遺跡を中心によつたムラ経営が行われている。ここで問題は、宝積で発見された住居はいずれも古期にあたり、松賀場・御戻では新期の住居が多い。それは古墳の築造と無関係ではない。古墳群は東台遺跡を中心に前方後円墳・方墳・円墳と18基以上確認されている。これらは7世紀代から築造され、終末まで継続される。この古墳群周辺から7世紀代の住居が消える。明らかにこの地が墓域として確立したからである。

Ⅴ、奈良・平安以降　松賀場遺跡を中心にして、住居が、一定範囲内に限定される。こうした遺跡の規模の縮小は、住居の小形化とも関連する。また宝積遺跡では戴骨器が3基発見されている。古墳群に隣接するため、古墳時代以降、平安時代まで墓域として確立していたものと考えられる。やがて中世における地下式塚を残してこの木田余台から姿を消している。

参考文献

川崎純徳1987「2. 北関東の櫛描紋土器」弥生文化の研究4

茂木雅博1985「常陸」季刊考古学第10号



土浦市遺跡調査会組織

会長	永山 正晃	土浦市文化財保護審議会会長
副会長	日下部 晃	土浦市教育委員会教育長
理事	茂木 雅博	土浦市文化財保護審議会委員 茨城大学人文学部教授
	田中 昭	土浦市都市計画部次長
	神野 幸一	土浦市建築指導課長 (S62. 4. 1~63. 3. 31)
	中山 清	土浦市建築指導課長 (S63. 4. 1~)
	神林 実久	土浦市耕地課長
	小川 和博	日本考古学研究所
監事	飯島 秀夫	土浦市教育委員会教育次長 (S62. 4. 1~63. 3. 31)
	杉野 利男	土浦市教育委員会教育次長 (S63. 4. 1~)
	滝ヶ崎 洋之	土浦市企画課長
幹事	佐野 賢治	土浦市教育委員会社会教育課長
	岩沢 茂	土浦市教育委員会社会教育課主査 (平成元年2月1日~)
	桜井 正広	土浦市教育委員会社会教育課文化係長
	石山 淳一	土浦市教育委員会社会教育課主幹
	石川 功	土浦市教育委員会社会教育課主事
	塙谷 修	土浦市立博物館学芸員

発掘調査組織

調査主体者	土浦市教育委員会
事務局	土浦市教育委員会社会教育課
調査担当	大渕 淳志 (日本考古学研究所)
調査員	小川 和博 (日本考古学协会会员・日本考古学研究所)

木田余台一茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

- I. 本書は茨城県土浦市木田余土地区画整理事業 (3)遺物実測及びトレース 小川 和博
業にかかる、木田余台遺跡群の発掘調査の概
報である。 (4)遺構図トレース 大渕 淳志
(5)組図版作製 大渕 淳志
- II. 本書の刊行に際しては、次のように分担し
て業務にあたった。
(1)編集及び監修 藤下 昌信 (6)遺物写真撮影 大渕 淳志
(2)執筆 小川 和博 (7)レイアウト 大渕 淳志
(8)イラスト 松浦 正美

発掘調査参加者

今泉 光夫	須貝 和子	浜田久美子	椿沢宣之助	椿沢とよ子	桜井 範
多羅澤源吾	小林 陸一	丸島 隆子	山口 仁一	山口 トヨ	宮代 謙
川村 俊夫	羽成 寿美	松浦 博子	山口 知子	黒田 吉也	野口 尋
黒田 なみ	小野 やよい	松浦 澄子	松浦とも子	山本 けい	中島 宏
久松 紀子	田口 和彦	山本 壮夫	松浦 正美	安田トミ工	赤堀 徹
中島さだの	今泉 正子	高橋 光子	川島 祐一	松司 征子	佐藤 啓啓
吉田 守之	岡林 俊光	間中 恵一	渡辺寿美江	斎藤 春治	佐野 栄
福田千香子	小林佐和子	竹内 政江	桜井 秀子	河原井 恵	塚本 裕
久保田広樹	清水ますみ	述村真由美	大塚しづ江	富田シジエ	折本 默
松浦 英子	酒井 恵子	間野嘉久代	鈴木 瑞子	代田 春江	丹羽 昌
飯田 正文	宮下 一政	黒田 すい	富島 栄子	篠輪 正直	林 美岐
松川さち子	小松崎広子	藤井 和子	坂本 雄一	松浦いく子	内河 速
小野 隆章	草間 明子	伊藤 俊男	永作 五朗	本橋 たけ	岡中 久
鈴木 つた	吉田 義弘	萩島 康生	鈴木由紀子	田中 徳重	小鳴 淳
石崎美代子	葛生角三郎	松浦 栄次	根本美香子	小林佐和子	益子 裕
永作 朝子	伊沢 真弓	高柳 久子	山根 悅二	諏訪 匠則	今井 菲
大渕 勇人	久松 克彦	二階堂貴士	宮本 典之	菊地美智江	川島 豊
小田倉静江	室町 泰史	高田 キク	渡辺たい子	酒井 俊明	
大久保清作	大久保ちよ	小野みつえ	高橋 弘人	村山 雅明	
羽成 重雄	小島たい子	天谷とよ子	木村 コト	島田みい子	
黒田あい子	野口生美子	小原 紀子	武藏 美和	峰谷 久恵	
木村 駿司	山岸 有礼	吉田 良子	田口 高広	大崎 舞子	
岡中てい子	大久保邦生	小田部義丹	高村 竜也	清水 紀亮	
小野 雅子	赤間雄二郎	米村 岳尚	谷口 充芳	飯田 とみ	
藤本 真一	小島 俊寛	高橋 和成	国分美奈子	紫田有紀子	
加藤 玲子	和田 佳子	豊田 竜也	塚本 正一	棚井伸一郎	
宇野 澄人	上坪 直之	越後 達夫	葉梨 美徳	井坂 洋子	
須貝 夏樹	宮本 公子	吉岡 秀敏	細田 次男	今泉 伸一	
辻村小百合	丸島未夕起	丸岡 公子	鳥羽 良子	竹内 理代	
吉田 敏子	諸田 京子	今泉 和子	今泉かつ枝	瀬古沢豊子	
大塚はる子	加藤 勝弘	今泉代志子	松下 正則	車田 浩幸	
肥田 泰治	松浦 康晴	高橋 晓子	関野喜久代	佐野美沙子	
浜田 雄一	久保田きくの	杉田七五三子			

発掘調査協力者

小野 明 松浦 俊夫 殿岡 明 小野 照

(順序不同・敬称略)

木田余台

—茨城県土浦市木田余地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—

1989年3月31日発行

編集 土浦市教育委員会
発行 〒300 茨城県土浦市下高津2-7-36

TEL 0298-22-2613

印刷 塚本プロセス
〒285 千葉県佐倉市王子台6-5-12
TEL 0434-87-0839

